釧路湿原
自然再生協議会

森林再生小委員会
ニュースレター

No. 2

編集・発行：釧路湿原自然再生協議会 運営事務局

発行日：平成16年7月27日

第2回森林再生小委員会　達古武地域現地視察

平成16年6月15日（火）第2回森林再生小委員会が開催されました

■開催概要

第2回森林再生小委員会が平成16年6月15日、塘路住民センターで開催されました。委員会には構成メンバー（個人14名、団体11団体、オブザーバー5団体、関係行政機関8機関）のうち、25名が出席しました。今回は、午前と午後に分けて委員会を開き、現地視察も行いました。午前の委員会で達古武地域の森林再生の調査・検討結果などについて報告を受けた後、今後森林再生モデル地区として試験的に森林再生に取り組んでいくNPO法人トラストサルン釧路の自然保護地と人工林を自然林に再生するための実験を計画している環境省のカラマツ人工林を視察しました。午後からは、再び塘路住民センターで委員会が再開され、雷別地区の森林再生について報告が行われました。その後、現地視察を踏まえたうえで、人工林から自然林への再生、エゾシカの被食対策等について、活発な質疑が交わされました。

このほか、釧路湿原流域全体の森林再生や全体構想との関わりなどについても協議が行われました。

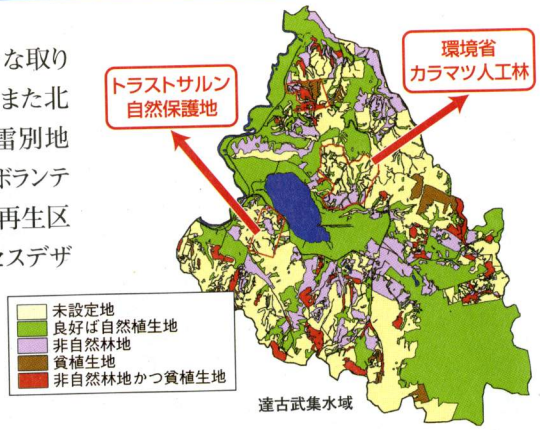
第2回森林再生小委員会（平成16年6月15日）

達古武地域現地視察

森林再生小委員会が、実施していること。こ

平成15年度の調査・検討結果及び平成16年度の調査・検討方針について

環境省とNPO法人トラストサルン釧路が共同で実施している達古武地域は平成14年度から各種調査を行い、平成15年度に再生検討ベースマップを作成しました。このマップを基に目標となる森林の抽出、モデル地域の選定などを行い、基本計画を策定しました。平成16年度からは基本計画に沿って、良好な自然林の保全と荒廃・劣化した森林の再生に向けて様々な取り組みを進めていくことになります。また北海道森林管理局が実施している雷別地区については、これまで行ってきたボランティア植樹に加え、平成16年度からは再生区域、事業内容、全体計画などプロセスデザインを検討していくことになります。



達古武地域森林再生について

基本方針

達古武地域は、集水域全体を統括的に捉え森林再生を進めていきます。進めるに当たっては、良好な自然林の保全を優先し、その上で荒廃、劣化した森林の再生を目指します。再生に当たっては、森林の回復状況や生育阻害要因の把握・分析、作業道からの土砂流出防止など、立地特性に応じたゾーニングを行い、再生手法を検討します。再生手法の検討においては「順応的管理」の考え方に基づき、実験を行いながら、自然の力で回復する手法を優先します。自然の再生状況をモニタリングし、上手くいかない場合には柔軟に方法を見直しながら最適な手法を見いだしていきます。

また、良好な自然林の保全に当たっては、保全が必要な森林の37%を林業関係の会社が所有していることから、これらの会社と森林保護のためのネットワークの構築を進めるとともに、地域内の90%以上が民有林であることから、今まで以上に湿原生態系に配慮した民有林行政が進められるよう関係機関に働きかけを行っていきます。

出席した林業関係会社からのコメント

●日本製紙（株）は標茶町側に260haほど社有林を持っている。現在、9割以上がトドマツ、エゾマツの人工林という施業体系となっているが、今後の経営方針としては自然の力を利用して元の天然林に換えていきたいという基本計画でやっている。その為、間伐を行いながら、その中で生えてきた広葉樹はそのまま残存木として保存していく経営をしている。

●達古武地域にある王子製紙（株）の社有林については、機能的に保全林として位置づけている。保水力、土の保持力などの優れた森林、下層植生の発達した森林を目標としている。今後は、カラマツ人工林を広葉樹の入った針広混交の複層林へ誘導することを検討したい。

モニタリングについて

自然林再生の目標は、本来の生態系の復元であるため、樹木の大きさや景観ではなく生態系の質で評価していくことにしています。複雑な生態系を指標化することは難しいですが、森林再生の方向性や到達度を検証していくためには、森林生態系を構成する動植物の調査を実施し、数値で客観的に比較できる指標が求められます。委員会ではこうした考え方を踏まえて、生態系指標を用いた評価とモニタリング調査の現状や今後の進め方などについて意見交換をしました。

このようなことが話し合われました

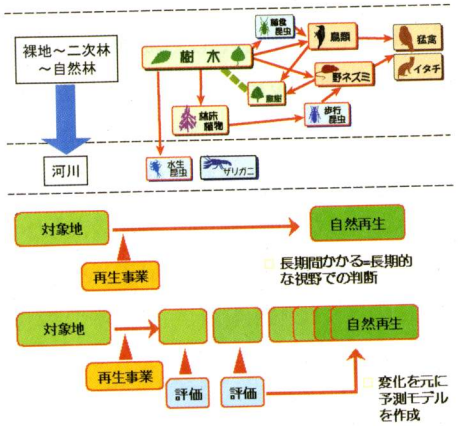
●委員長　●委員　●事務局

●指標を用いての評価、モニタリングを行うことは大事なことだと思う。例えば河川の蛇行復元でいうと、今の生態系のままでも良いのではないかという意見がある。今後こういうものも参考にしていきたいので、今回の指標調査で、どういう優位性が判ったのかを教えてほしい。

●生態系の機能は指標としてはかなり難しいものなので、とりあえず目標とするような場所の森林で、どういう生き物がいて、どういう状態なのかというのを見て、それに近づけていくのがひとつの評価だと思う。

●自然再生を機能論でやってしまうとあまり良くない。元々あった多様な生態系に戻すという前提があって、その結果として色々な生物が棲める場所ができるという評価の仕方のほうがいいと思う。

●生物の多様性の保全というのは、単に生物の種が多ければいいということではなく、過去の生物の多様性を理想の形として、それに近づけることだと思う。森林の生物の多様性だけに注目するのではなく、草原性の種や水辺の生物の多様性についても考慮したらいいのではないか。



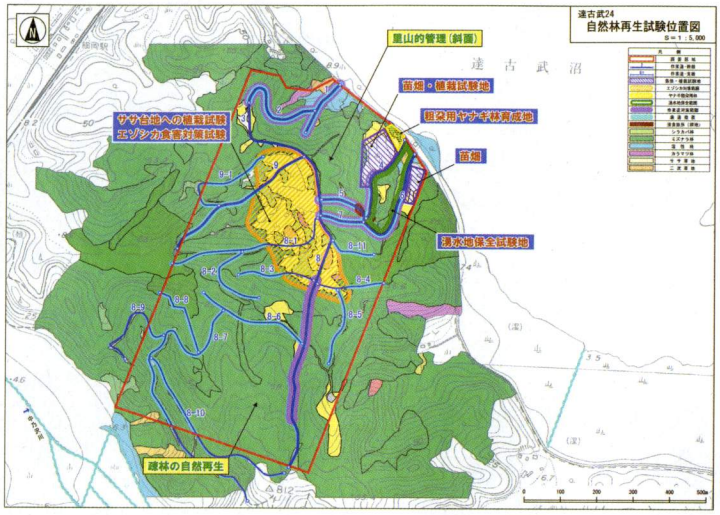
達古武地域における動植物の関わりとモニタリングの考え方

これから実施したいこと。

森林再生モデル地区における自然再生計画

◆NPO法人トラストサルン釧路自然保護地

森林再生モデル地区であるNPO法人トラストサルン釧路の自然保護地では、生育阻害要因などの各種調査結果に基づき、対象地域のゾーニングを行い、湿原や森林並びに水域環境の質の向上のための森林再生モデル計画を作成しました。平成16年度からはモデル計画に基づき、エゾシカ被食対策、地元産苗木による植栽、作業道からの土砂流出防止対策などによる自然林再生を地域住民や市民との連携にも配慮しながら、試験的に進めていきます。



このようなことが話し合われました

●委員長　●委員　●事務局

●シカ対策については、こうすれば大丈夫だという決定打は、最初からないと考えた方がよい。道立林業試験場等でのエゾシカの保全・管理の研究では、稚樹が大体30cmを超え、シカの生息密度が高ければほとんど全滅することが判っているので、シカ密度の指標を何らかの形で採らないと、今後のモニタリングが不十分になると思う。

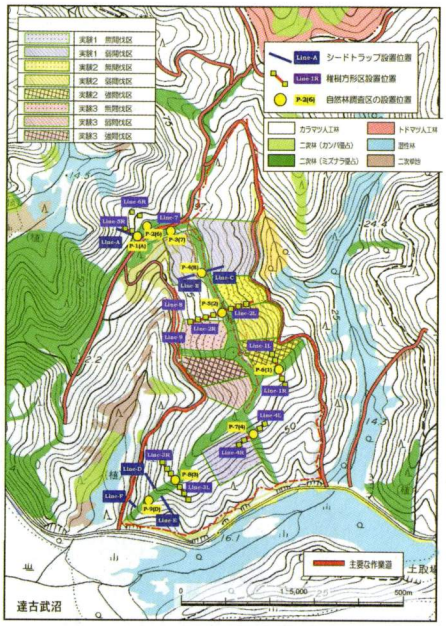
●シカの影響は一番大きいが、最近ウサギが随分増えてきて、シカ柵関係なしに食べられている。今日視察した場所でも、ウサギ・ネズミの両方に喰われていた。十勝三股では、シカ対策として大きな防鹿柵の中に、決して飛び越えられない2m四方くらいのフェンスを作っている。

●苗木については、根が3年経っていて、地上部が1年という3分の1苗の方が、山に植えるとき活力があってよく伸びることがある。

●現地の広葉樹の多くがヒコバエになっている。このままでは良い木になっていかないし、種子の実りも悪い。1本にして明るくすれば、枝ぶりも良くなり、種子も実りやすくなる。また、林床に光が通って、他の木も生えてくるようになるのでヒコバエだけはきちんとした方が良いと思う。

◆カラマツ人工林での自然林再生実験計画

カラマツ人工林では、生物の多様性及び森林機能を総合的に高めて、本来成立していた落葉広葉樹林へ徐々に再生していくことを検討しています。平成15年度は、広葉樹林化を阻害している要因や逆に促進させる要因について調査を行い、その結果をもとに阻害要因を除去することにより、広葉樹の更新を促進させるための実験計画の検討を行いました。平成16年度は、この実験計画に基づき、小規模な実験を実施していきます。



森林再生モデル地区（カラマツ人工林）自然林再生調査・計画図（案）

このようなことが話し合われました

●委員長　●委員　●事務局

●環境省のカラマツ林について、100年のカラマツ林にしたら素晴らしいと思う。そういった場所も残しつつ、それを対象区としながら、実験的に広葉樹を入れていくことを考えたほうが良いのではないか。

●カラマツ林の実験では条件を揃えた実験区を作り、稚樹が育たない原因がシカの採餌圧の影響なのかをはっきりさせる必要があるのではないか。

●今回カラマツ林では、いろんな試験区を設けるとのことだが、択伐的に切るのか、群状に穴をあけて切るのか、スパッと切るのか具体的な説明がなされていない。ミズナラに関しては萌芽更新をかなりする樹種だと考えているが、もう少し様子を見てからやった方がいいのでは。

●カラマツを立派に育てつつ、尾根の母樹林から広葉樹の森林化を促して、広葉樹林に移行したいと、大方針として考えている。そのために必要最低限どのように手を加えたら効果的に広葉樹に移行するのかを調査のみでなく、ある程度手を加えて、実験していかないと答えが見えてこない。

●間伐率や方法については、現在検討中ではあるが、本委員会の意見も反映させながら、現場でも更に精査したうえで、早ければ9月頃から実験を始めていきたい。

●結果については、2、3年あるいは数年掛けないと見えてこないものもあると思う。全体の計画については、今回の実験結果を見ながら考えていきたい。

●実験については、現地の「稚樹の有無」、「エゾシカの被食圧」、「林床のササの問題」、「母樹からの距離」など4つ位を基軸として考えられているとこのことで、これについては良いかと思うが、具体的な方法については、個別によく携わられている先生方や、実際に施業に携わっている方々のコメントを聞いて、この大筋のラインから離れなくて、しかも土砂が出るようなことをしないという前提であれば、問題はないと考える。

●いずれは更新して広葉樹、或いは針葉樹も入っていた自然の林に戻っていき、多様な生き物が生きられる林になってほしいと思う。

●最終的に、釧路湿原にとってよい働きかけができる森を作るにはどうしたらいいかという立場で考えていけばいいと思う。

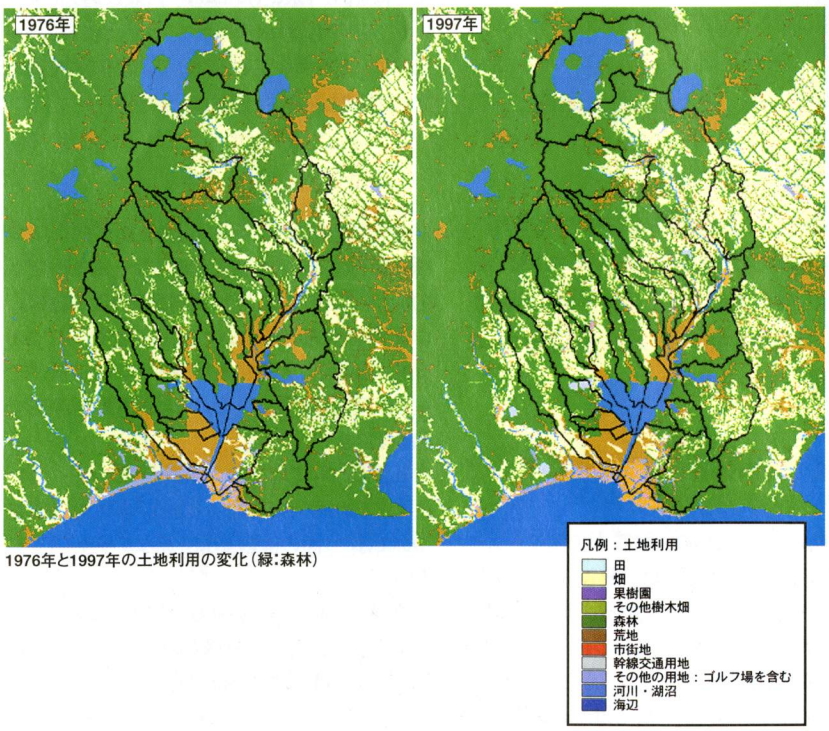
雷別地区森林再生について

雷別地区の国有林は釧路湿原国立公園に一部が接しており、トドマツの一部に立ち枯れの被害が出ていました。これまでに自然再生を目指しボランティアの協力を得て植樹を行ってきましたが、平成16年度も引き続きボランティア植樹を行いながら自然再生に関する調査費を活用し、調査内容やモニタリングの方法、事業内容、全体計画案、いわゆるプロセスデザインを考えながら、これまでより広い視野で森林再生に取り組んでいくことにしています。

釧路湿原流域全体の森林再生と全体構想との関わり

釧路湿原流域の森林面積は、20年で約10%減少しています。現存している森林を自然林と人工林との比率でみると、人工林が10%となっており、支流の流域によっては比率が50%を超えるところもあります。森林再生は釧路湿原流域全体に関わる問題であるため、「どこに森林が残されているのか、どこが失われたのか、その影響はどのように出ているのか、そして、どこを優先して森林再生をしなければならないのか」など、流域全体のデータを整理して議論していくことが確認されました。

全体構想は、今どこで、何が問題なのかを明らかにして、それに対して個々の処方箋を作り、再生のストーリーを組み立てます。再生事業を個別に見ると人為的な影響によって変化した場所とか、土砂や水位の問題など、湿原・森林・河川について、異なる要因があるため、最終的には5つの小委員会が釧路湿原の保全に収斂していく形で全体構想をまとめていく方向で検討しています。



1976年と1997年の土地利用の変化（緑：森林）

第2回 森林再生小委員会［出席者名簿（敬称略、五十音順）］

●個人

上野　義勝［北海道釧路森づくりセンター 森林整備課長］
宇野　裕之
金子　正美［酪農学園大学 環境システム学部 地域環境学科 助教授］
神田　房行［北海道教育大学釧路校 教授］
齋藤新一郎［環境林づくり研究所］
関尾　憲司［北王コンサルタント株式会社 環境企画部 主任研究員］
高嶋八千代［北海道教育大学釧路校 非常勤講師］
高橋　忠一［北海道教育大学釧路校 助教授］
中村　太士［北海道大学大学院 農学研究科 教授］

●団体

株式会社 北都［代表取締役 山崎 正明］
釧路自然保護協会［会長 高山 末吉］
釧路造園建設業協会［会長 長田 武興］
特定非営利活動法人 トラストサルン釧路［富井 隆］
日本製紙株式会社（（株）サングリーン）［営林部長　秦 弘康］
ボランティアネットワークチャレンジ隊［代表 佐竹 直子］

●オブザーバー

釧路町森林組合［参事 上野 功］
標茶町森林組合［参事 成田 勝利］
王子製紙株式会社（王子木材緑化（株）釧路営業所）［所長代理 伊東 隆男］

●関係行政機関

国土交通省 北海道開発局 釧路開発建設部［課長 平井 康幸］
環境省 東北海道地区自然保護事務所［所長 渡邊 綱男］
林野庁 北海道森林管理局 指導普及課［企画官 田坂 仁志］
北海道 釧路支庁 経済部林務課［課長 荻原 祐一］
釧路町 生活環境課環境対策係［係長 佐々木 俊司］
標茶町　農林課［課長補佐 浅井 日出男］
鶴居村　振興観光課［課長補佐 土居 孝之］

資料の公開方法

委員会で使用した資料および議事要旨は、釧路湿原自然再生協議会ホームページにて公開しています。
http://www.kushiro-wetland.jp/

ご意見募集

釧路湿原自然再生協議会運営事務局では皆様のご意見を募集しています。
電話・FAX・Eメールにて事務局まで御連絡ください。

釧路湿原自然再生協議会
運営事務局
TEL（0154）23-1353
FAX（0154）24-6839
［E-mail］info@kushiro-wetland.jp

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています